

## 『三国伝記』二伝本と『三宝感応要略録』

松尾 譲児

## 要旨

天台僧・玄棟撰の仏教説話集『三国伝記』の有力伝本には推定近世初期書写の国会図書館蔵写本(存八冊)と寛永十四年版本の二種が知られるが、双方が古態をとどめる本文徴証を有し、伝本関係の相対把握が難しい。

本稿では同書の梵・漢説話の最重要の出典である『三宝感応要略録』の訓読史を論じた旧稿において詳細な分析を留保していた、『三国伝記』の確実な出典との比較対照への有効視に立脚する対照作業を行う。

国会図書館蔵写本は本文や語序の一致等から、作品成立時の本文を比較的保存するようである。寛永十四年版本は質量ともに訓点が充実に、作品享受に付帯する訓読方式を比較的保存する伝本と位置づけうる。

## 一、問題の所在

近江国の天台僧・玄棟撰の『三国伝記』は全十二巻・各30話(総計360話)を収める仏教説話集で、主要伝本には推定近世初期書写の国会図書館本(以下「国本」と適宜称する<sup>①</sup>)と、いずれも同版の寛永十四(1637)年・明暦二(1656)年・無刊記の版本三種(以下「版本」と適宜称する)の二種が知られる。

国本・版本間の夥しい本文異同が投げかける問題点は必ずしも解決済みではないが、先考として版本文の浄土教的改変を指摘した

池上洵一(1982)や、新出資料の紹介にあたって両伝本との本文比較を行う渡邊信和(1983)、黒田彰(1984)、(1985)、湯谷祐三(1998)、渡辺匡一(2003)を挙げる。

『三国伝記』は中世成立の有力伝本に恵まれず、新出資料の定位には国本・版本との本文比較の重要性が高いが、その中でも池上洵一(1982)は両伝本それぞれが有する本文的特徴について次のように端的にまとめている。

- ①、版本は本文に回りとくさまをもつのに対して、国本は言葉がよく補われている。
- ②、国本のわかりやすさが伝本の素性のよさを保証するとは言いつても、かえって後人の補筆と思われる例が少なくない。
- ③、一方で版本本文にみられる浄土教的改変については編者玄棟の何ら関知しないものであって、この点については国本が古態をとどめることが明らかである。

すなわち現存の『三国伝記』国本・版本の本文はともに作品成立時の本文からは隔たりを持ち、作品本文の変容の主因には現存伝本に到るまでの度重なる転写や、活発な作品利用に伴う複次的な本文の付加脚色などの可能性が考えうる。

国本・版本それぞれの独自本文の吟味から帰納される、古態的本文の判断基準をいかなる角度から求めるかが課題となるが、稿者は編者玄棟の『三国伝記』編纂への活用が推測される依拠資料の援用が実証性を持たせる上で有効と考え、以下本稿では重要な出典源である『三宝感応要略録』出典説話を素材に論述する。

二、『三國伝記』における『三宝感応要略録』利用

『三宝感応要略録』は、中国遼代の高僧非濁(1063)により編纂された、上巻五〇話・中巻七二話・下巻四二話の三巻一六四話からなる仏教説話集である。大陸では早くに散逸しながらも日本では簡便な仏教説話集として重用され、伝本も院政鎌倉期を中心に古写本数本と慶安三(1650)年版本が知られる。

同書が日本の仏教説話集に与えた影響の考察は『今昔物語集』を中心に進められているが、『三國伝記』における出典利用も塚本善隆(1944)の認定に始まり、いずれも論旨を摘要するように両文献の研究史において画期的意義を有する①②③の各論考で、引用話数の確定と補訂がなされ現在に至っている。

①…小林忠雄(1947)

『三國伝記』の出典研究をそれまで手薄であった仏典関係にも展開し、『三宝感応要略録』所収説話のうち過半数の八四話を出典に認定。同時に編者玄棟が『三宝感応要略録』をよく理解し消化しつつ利用したことを縷説する。

②…池上洵一(1979)

『三國伝記』を含む中世説話文学における『三宝感応要略録』受容史を概観し、小林論文の出典認定から本文相違の著しい巻十二26を削除し、一方で巻二4・巻六4を追加する。

③…李銘敬(2007)

日本仏教説話集の構造解明を目的に『三宝感応要略録』自体の精緻な研究による日本仏教説話集の構造解明を試みた論考であり、『三國伝記』巻五25話を出典に追加する。

私見を追加すれば右の出典話の一部には、編者玄棟が別資料を併用する若干の説話を含む。たとえば池上洵一(1979)が削除する巻十二26は部分的に『三宝感応要略録』をも利用しているし、氏が出典に追加認定する巻二4の出典『三宝感応要略録』上1話は、黒田彰(1981)の指摘のように『三國伝記』と成立時代・成立圏が酷似し同書の一出典と推定される『和漢朗詠集和談鈔』592雑・仏事「昔切天の安居九十日」の出典でもある。

黒田説に対し牧野和夫(1983)は李嶠百詠注の類似箇所を媒介に『三國伝記』『和漢朗詠集和談鈔』共通の根源資料を想定する。両書の影響関係の有無は容易に決しがたいが、本話は原典屈指の長大説話でもある上1話に比して省筆が顕著で、玄棟は『三宝感応要略録』をも直接参看し、大筋では『和漢朗詠集和談鈔』ないし根源資料を利用したとみられる。

さらに本稿追加の巻二11話「天台大師事」は、池上氏注釈(上)が指摘するように、天台大師の伝記を伝える諸書に見えない記述が散見されるが、頭注四で指摘される生没時の逸話、頭注二五で指摘される浄名経講義の際の奇瑞は、ともに『三宝感応要略録』中18話に対応箇所を指摘しうる。

巻二11話は諸書を引いて出典操作が複雑で、元来短文の中18話の二つの段落は、巻二11話の冒頭と後半部に分断されている。さらに後段は寛永十四年版本に欠いている事情もあって、先学では見落とされていたようである。池上氏(実線)・李氏(破線)・稿者(波線)の訂正結果を以下【表一】に示す。

【表一】『三國伝記』の『三宝感応要略録』出典説話一覧

- 卷一…第7—下40
- 卷二…第1—上22・第2—上24・第4—上1・第11—18  
 ・第14—中7
- 卷三…第1—上19・第2—上15・第14—中48・  
 ・第22—中50後半
- 卷四…引用話なし
- 卷五…第1—下32・第4—下35・第5—下34  
 ・第8—下2・第10—下36・第16—上46  
 ・第22—中23・第23—中33・第25—中14  
 ・第29—中47
- 卷六…第1—下3・第2—下6・第4—上45・第5—中43  
 ・第8—下5・第20—上31・第22—上18  
 ・第23—上13・第25—上11
- 卷七…第2—中60・第10—上43・第13—中42  
 ・第14—中70・第23—中24・第25—下23  
 ・第26—下22
- 卷八…第2—下28・第4—下24・第5—下21  
 ・第8—中66・第11—中16・第16—中28  
 ・第23—中64
- 卷九…第5—中26・第14—上35・第16—上50  
 ・第17—上32・第19—上33+上34  
 ・第20—上36・第25—上48・第26—中37  
 ・第28—中52・第29—中57
- 卷十…第11—上28・第14—上7・第16—中2  
 ・第17—中4・第19—上44・第20—上14

- ・第23—上21・第26—上9・第29—下31
- 卷十一…第2—下9・第4—下27・第5—下10  
 ・第7—上23・第10—上10・第11—中9  
 ・第14—中46・第20—下38・第22—中11  
 ・第23—下39・第26—下29・第28—中71  
 ・第29—下37
- 卷十二…第1—上29・第2—中61・第4—中13  
 ・第5—中62・第7—中12・第8—上20  
 ・第11—中53・第16—中27・第23—下19  
 ・第26—中25・第28—上30・第29—下14
- 『三国伝記』各巻の引用話数を丸括弧で示せば、卷一(1)・卷二(5)・卷三(4)・卷五(10)・卷六(9)・卷七(7)・卷八(7)・卷九(10)・卷十(9)・卷十一(13)・卷十二(12)の以下87話である。『三宝感応要略録』の連続する二話を纏めて引用する巻九19を除いて一話同士が対応する。
- 『三国伝記』の梵・漢説話(計240話)中、『三宝感応要略録』の出典話は三分の一強を占める。また出典話の比率は後半部に漸増するが、池上洵一(1970)は玄棟が説話編纂を進めるにつれて梵漢説話の取材源不足に悩んだ結果と推測し、同書を梵・漢・和の三国構成を成り立たせる編者の根幹資料であったとする。
- いずれにせよ出典源が判明している『三国伝記』説話において『三宝感応要略録』からの引用説話数は自余の典籍を圧倒しており、まとまった言語量を得られる『三宝感応要略録』出典説話を考察素材とした、二伝本の本文異同の検討は有効であろう。

三 『三宝感応要略録』慶安版本と『三国伝記』訓点

『三宝感応要略録』など漢文文献に依拠する仏教説話の成立と流布に関する先考では、訓点の荷担する役割への注視はそもそも寡少であった。『三国伝記』の国本・版本の訓点を詳細に論じた先考は管見の限り知られないが、同書の近世における享受資料である『三国伝記（平仮名本）』や『仏法寄妙集』（新選沙石集）の定位にも訓点を射程に入れた対比が求められよう。

まず『三国伝記（平仮名本）』は全十五卷（巻一を除く十四巻現存）の寛永年間からそれほど下らない近世初期転写の孤本で、渡邊信和（1933）より要点を引けば次のようである。

平仮名本は全般にわたって説話を草子風に改め、和漢混淆文体を和文脈の擬古文体とするなど物語的にする傾向がある。…（中略）…写本と板本とが異なっている部分について平仮名本を検すると、板本により近いという傾向があり、平仮名本は板本系統の本文に拠ったと思われる。

次に寛文七（1667）年刊の『仏法寄妙集』（元禄九（1696）年刊の改題本『新選沙石集』と無刊期版本もある）について、黒田彰（1984）の解説より要点を以下引用する。

新選沙石集（仏法寄妙集）は、三国伝記十二卷、全三百六十話の内、約その六分の一、六十五話を抜出して、版本系と思しいその本文を忠実に漢字平仮名交り文に読下したもので、三国伝記の中世末・近世における流伝・受容を考える上で、また、写

本・版本を併せても難読箇所が多い三国伝記本文の、中世末・近世初期の訓法を知る上で、看過し得ぬ貴重な資料である。

前節初頭で述べた近世初頭以降の数次の『三国伝記』の版行状況からすれば、同書の商品流布との適度なタイムラグをもって、寛文七年版『仏法寄妙集』や元禄九年版『新撰沙石集』が成立しているといえよう。本文比較は後に譲るが、『三国伝記（平仮名本）』・『仏法寄妙集』ともに版本との本文の近似性が論じられていることは、訓点をも含め版本を媒介とする、近世の『三国伝記』流布状況の反映である蓋然性が高い。

まず『三宝感応要略録』慶安版本の本文および訓点と、『三国伝記』版本本文および訓点との近似度について、『今昔物語集』にも取材されている説話を取り上げて対照してみたい。検討対照は【資料一】『三宝感応要略録』中48話「唐豫洲神母聞大般若経名感応」、同話を出典とする【資料二】『今昔物語集』巻七3話「震旦預洲神母聞般若生天語」および、【資料三】『三国伝記』巻三14話「神母被牛牽到仏寺事」の三者である。

【資料一】『三宝感応要略録』巻中48話（慶安版本）

後ノ時神母遭テ疾ニ死ヌ。

嫡女思ニ慕ケテ。

夢ニ告テ曰ク我死シテ

至ルニ于閻魔法王ノ処ニ唯有テ悪業ノミ一莊嚴シテ身ヲ

全ク無シニ少分ノ善根一国王

捨シテ札ヲ而微嘆シテ云ク汝有下聞ク般若ヲ称スラレ名ヲ善上

還テ於人間ニ応レ持テスニ般若ヲ

然ニ人業盡テ

遂ニ生ヘシニ切利天ニ

不レ応レ生スニ憂念ヲ

夢覺テ而写スニ般若ヲ

将ニ三百餘卷見ニ在リ矣。

【資料二】『今昔物語集』巻七3話

其ノ後神母、身ニ病ヲ受テ死ス。

其ノ嫡女有テ母ヲ恋ヒ悲ム程ニ、

夢ニ神母告テ云ク我レ死シテ

閻魔王ノ御前ニ至レリ。我カ身ニ惡業ノミ有テ

全ク少分ノ善根無シ。而ルニ王

札ヲ檢テ咲テ宣ハク、汝デ般若ノ名ヲ聞キ奉レル善有リ。

速ニ人間ニ還テ般若ヲ受持シ可奉シト。

然リト云ヘトモ我レ人業既ニ盡テ、

活ル事ヲ不得スシテ切利天ニ生セムトス。

汝子強ニ歎キ悲シム事無カレ、

ト云フト見テ夢覺ヌ。

【資料三】『三國伝記』巻三14話（寛永十四年版本）

其ノ後テ彼ノ神母病イシテ死ス。更ニ仏經ニ不レ知レ遇

者ナレハ何罪深ルラント思ケルニ

彼ノ嫡ノ女ニ夢ニ告テ曰ク我レ死テ

至ルニ炎魔法王ノ所ニ「唯有テ惡業」

莊ニ嚴シ身ヲ全ク無シニ少ク分善根炎」王

檢札ヲ微咲シテ云ク汝有テ三聞コトニ般若ノ名ヲ

『三國伝記』一伝本と『三宝感応要略録』

先ツ還ニ人間ニ応シニ般若ヲ持ス

人業盡テハ生ヘシニ切利天ニトテ

免ルサル。仍今人間ニアリテ大般若ヲ書写ス

汝不レ可レ生スニ憂念ヲト云々。

夢覺ヌテ書写ノ

大般若ニ三百餘卷現ニ在リ。

『三宝感応要略録』の典本文は説話的魅力と本文読解の難しさ

を併せ持つており、これが『今昔物語集』（太字箇所）・『三國伝

記』（波線箇所）のそれぞれが随所に敷衍脚色を施す契機となつた

と考えられる。『三宝感応要略録』原文は、人業の尽きてしまつた

神母が切利天に転生し、神母から夢告を受けた嫡女が発心して大般

若經三百余卷を書写するという趣意であり、【資料二】の『今昔物

語集』本文の理解も概ねこれに沿っている。

国会図書館本に欠く巻三は寛永十四年版本しか比較できないが、

『三宝感応要略録』尊經閣本との対照結果をふまえた先考で明らか

になつてゐるように、『三國伝記』本文の「捨・檢」・「微嘆・微

咲」は、慶安版本本文よりも良質である。ただし慶安版本に存する

「然ニ」の文字を『三國伝記』では欠いており、「人業尽テハ切利

天ニ生ヘシ」を閻魔王の発語と解してしまつた結果、神母が人間

として再生後に大般若經三百余卷を書写し、嫡女への夢告により三

百余卷を託したと読み誤られてしまつた。

以上の整理をふまえて『三國伝記』巻三14話に取材する【資料

四】『仏法寄妙集』第二23「神母が牛にひかれて仏寺にいたる事」

および、【資料五】『三國伝記（平仮名本）』巻五4話「牛にひか

れて、たうにまいりし事」の本文を次に掲出する。

【資料四】寛文七年版『仏法寄妙集』

そのうちかの神母やまひして死す。さらに仏經に値遇

せざるものなれば。いかにつみふかゝるらんと思ひけるに。

かの嫡女に夢につげていはく

我死てゑんま法王のみもとにいたる。たゞあくごうのみ

あつて身を莊嚴し。まつたく少分の善根なし。ゑんわう

札をかながへて微咲していはくなんぢ般若の

名をきくことあり。まづ人間にかへりはんにやを持すへし。

人業つきては切利天に生ずへしとてゆるさる。

よつていま人間にありて大はんにやを書写す。

なんぢ憂念を生ずへからずと云々。

ゆめさめて書写の

大般若三百余巻現あり。

【資料五】平仮名本『三國伝記』巻五4話

そのうち、神母、つゐにおはりぬ。一しやう仏にちくうし

奉らされは、さこそ、つみの深かるらんと、

かのむすめ、なげきかなしみけるに、ある夜、夢につけて云、

我すてに死して後、えんまのちやうに至りしかは、

えんわう、

ふたをひらきかんかへて、の給はく、なんぢ、はんにやの

名をきく事有。よつて、人間にかへり、はんにやをちすへし。

にんこうつきは、たうり天に生すへしとて、ゆるしかへされ、

そせいして、いま人間に生をうけ、大はんにやをしようしや

する也。なんぢ、うれふる事なかれ。これ則、しようしやの

経なりとて、あたへ給とみて、夢さめたり。きいのおもひを

なす所に、大般若六百よくわん、うつゝにあり。

【資料三】と【資料四】の対照から明らかのように、『仏法寄妙

集』の本文は『三國伝記』寛永版本の訓み下し結果との同文性がき

わめて高い。ただし『三國伝記』本文は原則的に漢文語順を濃厚に

とどめており、和文語順かつ大書仮名書きの箇所は、先に波線を付

した編者玄棟の敷衍脚色が行われた箇所集中する。

そもそも管見に入った『三國伝記』の各受容作品からは、原典の

漢文語順を排除する傾向が強いことが知られるが、『仏法寄妙集』

や『三國伝記』(平仮名本)』では平仮名文を採用することで全くの

読み下し文となっており、近世初頭の『三國伝記』享受における平

仮名文への指向を看取しうるといえよう。

また【資料五】の『三國伝記』(平仮名本)』の本文は、『三國伝

記』寛永版本とおぼしき伝本の訓み下し文を基盤としつつ、さらに

太字で示した敷衍脚色を随所に加える。とりわけ夢告の場面には神

母が書写した大般若経の嫡女への授与を加筆し、書写した巻数も大

般若経の全六百巻とするように変更が顕著である。

以上みてきたように近世の『三國伝記』享受資料である『仏法寄

妙集』や『三國伝記』(平仮名本)』は、寛永版本ないし後刷本の本

文・訓点の訓み下しを基盤とした蓋然性が高く、作品流布における

訓点の重要性が注意されるところである。

四、『三國伝記』の国本訓点と版本訓点

前節で確認された『三國伝記』の近世における享受と訓点との密

接な関係については、『三宝感応要略録』慶安版本の訓点と、同書

を出典とする『三国伝記』説話の訓点との関係においても、同軌の傾向が看取される。

ただし先述のように、『三国伝記』の国会図書館蔵写本と寛永十四年版本との間には夥しい異同がみられるから、伝本異同と訓点の関係を押さえておく手続が必要といえよう。

次に【資料六】『三宝感応要略録』上29話「造毘盧遮那佛像扠障難感応」を出典とする『三国伝記』卷十二1話「韓索迦国毘盧遮那像事」を取り上げるが、まず【資料七】『今昔物語集』卷六27「震旦并洲常愍渡天竺礼盧舍那語」を二者対照する。

【資料六】『三宝感応要略録』上29話（慶安版本）

昔シ此国ニ神鬼喬乱シテ

人民荒廢ス。有リニリノ尼乾子。善クスニ占察ヲ。

国王占シムニ国ノ荒蕪ヲ。

尼乾以テレ籌ヲ印シテ地ニ云ク

荒神乱ニ起ス障難ヲ。須クヘシ帰スニ大神ニ。

方ニ得クマハンニ安穩ヲ。王聰明ニシテ

達スニ帰宗ニ。神ノ中ノ大ナルハ不スト云テレ如ニ仏陀ニ

即チ造テニ此ノ毘盧遮那ノ像ヲ

安ニ置シテ左右ノ精舎ニ。

左リニ彫ニ鏤シ黄金ヲ、

右ニ用フニ白銀ヲ。高サ咸ク二十丈。

日々ニ礼拝供養ス。

【資料七】『今昔物語集』卷六27

昔シ其ノ国ニ鬼神有テ人民ヲ悩乱ス。此レニ依テ国荒レ廢ル。

『三国伝記』一伝本と『三宝感応要略録』

其ノ時ニ一人ノ尼乾子有リ。善ク諸ノ事ヲ占ヒ察ス。

国王此ノ尼乾子ニ国ノ荒廢セル事ヲ問ヒ給フ。

尼乾子即チ籌ヲ以テ地ヲ印シテ云ク

此レ荒神有テ障難ヲ乱レ発ス。須ク大神ニ帰セハ返テ

安穩ナルヲ得テムト。王此ノ事ヲ聞キ給フニ心聰明ニシテ

思給ハク大神ニ帰セムヨリハ仏陀ノ加護ノ憑マムニハ

不如シト思給テ即チ此ノ毘盧遮那ノ像ヲ

左右ノ精舎ニ安置シ給ヘリ。

左ニハ黄金ヲ以テ彫鏤セリ。

右ニハ白銀ヲ以テ造立セリ。高サ各二十丈也。

日々ニ供養シテ礼拝恭敬ス。

まず『三宝感応要略録』の諸本異同については、慶安版本の傍線「咸ク」は金剛寺本では「滅」・尊経閣本では「滅」にそれぞれ作り、中国口語表現の見地からは「減」は「未満」の語義であつて尊経閣本の形が正しい。慶安版本「咸ク」・今昔本文「各」の本文理解に問題があることはすでに論じたが、『三国伝記』は国会図書館蔵写本・寛永十四年版本ともに「滅」に作っている（注一）

次に『三国伝記』の伝本について、【資料八】国会図書館蔵写本、

【資料九】寛永十四年版本として二者を対照する。(0) (10) は『三宝感応要略録』慶安版本・『三国伝記』国本・版本の三者を対照し、『三国伝記』における出典との本文異同を示したものである。版本独自の異同(0)は、「橋」・「喬」いずれも「驕」(おごる)意に通じることが関わる。

【資料八】『三国伝記』卷十二1話（国会図書館蔵写本）

昔此国神鬼番乱シ

人民荒廢ル。時(1)有リ三ノ尼乾子ノ善クスル「占察」。

国王召テ(2)令(3)占ナハ二国ノ荒蕪ヲ一。

尼乾以テ「籥」印レ地ヲ云

荒神乱起シテ(4)障難アリ(5)。須ク「ヘシ」下「販」シテ「大神」ニ

得「安穩」コトヲ「上」云々(6)。王聡明博(7)達ニシテ

為ルニ「販」宗セシト。神中之大ナルコト不レ如「仏陀」ニ曰(8)、

即チ造テ「此毘盧遮那ノ像」

安「置」ス左右ノ精舎ニ。

左ニ「彫」レ「鑲」シ黄金ヲ、

右ニ「刻」(9)ニ用白銀ヲ。高減二十丈ナリ。

日々礼拝シ夜々(10)供養セリ。

【資料九】『三國伝記』卷十二一話(寛永十四年版本)

昔此ノ国ニ神鬼橋(10)乱シ

人民荒廢ル。時(1)有リ一ノ尼乾子ノ善クスル占察ヲ。

国王召テ(2)令(3)占ナハ二国ノ荒蕪ヲ一。

尼乾以テ籥印地ヲ云ク

荒神乱起シテ(4)障難アリ(5)。須ク「ヘシ」下「販」シテ大神ニ

得安穩コトヲ云々(6)。王聡明博(7)達ニシテ

為ルニ「販」宗セシト。神中之大ナルコト不レ如「仏陀」ニト曰テ(8)、

即造テ此ノ毘盧遮那像ヲ

安置ス左右ノ精舎ニ。

左ニ「彫」鑲シ黄金ヲ、

右ニ「刻」(9)用ス白銀ヲ。高減二十丈ナリ。

日々ニ礼拝シ夜々ニ(10)供養ス。

本文異同(1)〜(10)は以下の二種に大別しうる。

①、文言付加による異同 1・2・6・7・9・10

②、訓法にかかわる異同 3・4・5・8

周知のように『三國伝記』本文には出典文献に由来する本文に加え、編者玄棟により随所に文飾表現が挿入される傾向が顕著であるが、右の①からも(9)の原典の舌足らずな語調の整齐や、(10)の対句表現の構築などを例示できる。

右の表現の細部にわたる玄棟の目配りを後押ししたのは、原典の綿密な読み込みの賜物でもあつたろうが、私見では②の訓読方法に關わる異同がこれを示唆していると思われる。たとえば(3)の「令」・(8)の「ト曰テ」は、慶安版本の対応箇所における訓点「シム」・「ト云テ」の本文化と考えられるのである。また(4)・(5)は玄棟が慶安版本の「荒神乱」起「障難」一」とは異なる訓法に基づいたためと考えられる。

また「須ク「ヘシ」下「販」シテ「大神」ニ「得」安穩「コト」ヲ「上」(国本)は複文・単文の相違があるが、これらの箇所を除外すれば『三國伝記』二伝本の訓点はともに慶安版本にかなり近く、部分的に訓法が異なる箇所を含みつつも、原則的には類似的な訓法に属するといえる。

本話は『仏法寄妙集』に採られず『三國伝記(平仮名本)』では卷十五一話「鞞索迦国、ひるしやなのさうの事」として採られる。『三國伝記(平仮名本)』所収話は先掲の渡邊論文が論及するようには、概ね文体改変の域を出ないが、本話も含め別資料などを介した増補改変を行う話も六一話ある。本文を【資料十】に掲出する。

【資料十】『三国伝記（平仮名本）』巻十五1話

むかし、てんちく、ひさくか国に、きしんきようらんして、  
人民をなやませり。こゝに、尼けんしといふ云うらないあり。

大王、この尼けんしをめして、国のあれすさふ事を

うらなはしめ給。にけんし、ちうをもて、ちをいんして云、

かう神みたれおこれる。大神にきして、あんおんを

いのるへしと申。大王、そうめいはくたつにして、

きしうせん神、仏たにしかしとて、

ひるしやな仏のさうをつくりて、

わうしやうの南道の左右のしやうしやに、あんちし給。

しやうしやのたかさ二十丈、左はわうこんをちりはめ、

右は白銀をきさめり。

日夜、らいはいくきやうしたまひしかは、

『三宝感応要略録』上29話は【資料六】引用箇所の前段に轉索  
迦国の毘盧舎像の位置描写を、後段に佛像安置後の感応を有し、『今  
昔物語集』『三国伝記』にも蹈襲されるが、『三国伝記（平仮名本）』  
は前段を削除の上【資料十】波線箇所に移植する。

太字の独自描写の大半は、やはり『三国伝記』本文の訓点をもと  
とした訓読結果に基づいて表現を和らげた箇所、手法的には先掲  
【資料五】に引いた巻五2話の表現改変と同様である。

『三国伝記（平仮名本）』における改変傾向については各話ごと  
の検討が必要で、稿者も『三国伝記』および各受容資料の援用によ  
る別稿を予定しているが、『三国伝記』二伝本および受容資料に観  
察される顕著な本文異同は、総体的な作品規模と言語量からすれば  
一部箇所に限定的・散発的に集中するといえよう。

『三国伝記』二伝本と『三宝感応要略録』

国会図書館蔵写本と寛永十四年版本との訓点比較からは、一方の  
欠落はあっても訓の異同は少なく、両伝本の訓点の大半は相補して  
訓み下しうることがわかる。また『三国伝記』『三宝感応要略録』  
両者の訓法も、多少の異同はあるが相関性は高い。

##### 五、『三国伝記』二伝本における訓点の数量比較

『三宝感応要略録』は説話集としての完成度や典拠利用の簡便さ  
から日本で広範な受容を獲得したが、拙稿(2010)では作品読解と訓  
点の関連性から受容史を概説した。論旨を摘要すれば慶安版本は浄  
土宗で管理された伝本の末流であり、その祖点と目される訓法は院  
政期末期には成立し、天台・真言・浄土各宗で個別の展開を遂げ、  
中世以降の受容資料に広く影響を与えたのである。

如上の『三宝感応要略録』慶安版本訓点の定位は、『三国伝記』  
の本文研究に対しても有効な援用資料となるが、稿者が出典認定し  
た87話から編者玄棟の潤色表現を除いた本文箇所を対象に、『三  
国伝記』二伝本の訓点の一致度を確認しておく(注二)。

【表二】には国会図書館蔵写本の現存八冊について、『三宝感  
要略録』出典話の二伝本の有訓の本文文字数(被注字)を示した。  
国本のみ有訓の被注字はA(写本)、版本のみ有訓の被注字はB(版  
本)、国本・版本が同一訓の被注字はC(共通)、国本・版本が異  
訓の被注字はD(異同)とした。

【表二】『三宝感応要略録』出典話における有訓被注字の異同

総計	卷十二	卷十	卷九	卷八	卷七	卷六	卷二	卷一	
一、 一一九	二四四	一八〇	九〇	一九一	一五六	一六九	五三	三六	A・国本
二、 三二八	四三〇	三七四	二七六	二七二	二一一	三一二	三六六	八七	B・版本
四、 三七五	八三七	八一六	四六三	五七四	四九五	七三七	二七三	一八〇	C・共通
三二四	六八	五一	四五	三五	四六	四一	二五	一三	D・異同

【表二】の観察結果から、次のことが明らかにになる。

- ①、国本・版本ともに同訓を有する被注字が最も優勢である。
  - ②、一本のみ有訓の被注字は、版本が国本を大きく上回る。
  - ③、両本が別個の訓みを有する被注字は相対的に少数である。
- A・B・Dは国本・版本の本文異同からの影響例も含むためC

総計	卷十二	卷十	卷九	卷八	卷七	卷六	卷二	卷一	
五、 八一八	一、 一四九	一、 〇四七	五 九八	八 〇〇	六 九七	九 四七	三 五一	二 二九	E
1 9, 2	2 1, 2	1 7, 2	1 5, 1	2 3, 9	2 2, 4	1 7, 8	1 5, 0	1 5, 7	A ÷ E
7 5, 2	7 2, 8	7 7, 9	7 7, 4	7 1, 8	7 1, 0	7 7, 8	7 7, 8	7 8, 6	C ÷ E
5, 6	5, 9	4, 9	7, 5	4, 4	6, 6	4, 3	7, 1	5, 7	D ÷ E

の比重は実数値以上に大きい。如上の訓点の一致度の高さは、漢文文献の流布過程における訓点の継承傾向を示唆する。次の【表三】には一段目に国本の有訓被注字の総和Eを漢数字で示し、二段目以下にEに対するA・C・Dの百分率をアラビア数字で示した。

【表三】国本の有訓被注字の言語量

総計	卷十二	卷十	卷九	卷八	卷七	卷六	卷二	卷一	
七、〇二七	一、三三五	一、二四一	七八四	八八一	七五二	一、〇九〇	六六四	二八〇	F
33, 1	17, 7	30, 1	35, 2	30, 9	28, 0	28, 6	55, 1	31, 1	B ÷ F
62, 3	62, 7	65, 8	59, 1	65, 2	65, 8	67, 6	41, 1	64, 3	C ÷ F
46	51	41	57	40	61	38	38	46	D ÷ F

【表四】 国本の傾向として版本と訓みが共通する被注字は70%超と優勢で、国本のみ有訓の被注字は20%前後、国本・版本が異訓の被注字は10%未満と低い。同様に【表四】として版本の有訓被注字の総和FおよびB・C・Dの百分率をアラビア数字で示す。

【表四】 版本の有訓被注字の言語量

【表四】の結果をみると、Cの国本と訓みが共通する被注字が各巻ともに優性であるが70%を超過するものはない。Bの版本のみ有訓の被注字は巻によって10%代と50%代と開きがあり、国本の訓みが版本と異なる被注字は各巻とも10%未満と低い。ただし国本各巻でA・C・Dの偏差が小さかった傾向とは異なって、版本ではBの各巻数値は八巻平均から大きくずれており、Cの比率を押し下げる要因となっている。

国本・版本が揃っている八巻では、Bの数値がCの数値を大幅に下回るのが通例であるが、例外の巻二（計五話）はBの百分率が50%を越えて逆転傾向を示す。

巻二第1（A||七・B||七一・C||三二・D||二）・第4（A||一四・B||一六〇・C||二二九・D||〇）の二話は（B<C）で、第2（A||一四・B||四四・C||四七・D||〇）はB・Cがほぼ拮抗する。巻二の上記三話に限って版本独自の訓が多い理由には、この箇所への集中的な訓の補充が考えられよう。

『三宝感心要略録』諸伝本中、慶安版本は唯一ほぼ全文に訓点が施されているが、系統的には末流伝本に位置するため本文の遜色が甚だしく、訓点にも本文誤脱や本来の訓点遺失箇所への後補による影響が間々みられ、訓法の相対化には課題もなお多い。

同書の最重要の受容作品の一つである『三國伝記』との対照作業は、『三國伝記』の伝本関係解明にとどまらず、『三宝感心要略録』自体の伝本研究にも裨益する点が大きいと目される。

なお『三國伝記』版本の一部説話には、念仏勸化僧の手によるとみられる浄土教的改変が顕著な本文箇所が散見されるが、このような箇所でも訓点に詳細な改変を施した痕跡は見出しがたい。

六 おわりに

本稿は博士学位申請論文『大陸仏教文学の受容と訓読の研究』のうち、拙稿(2010)に相当する第一部第一章・第二部(第四～七章)、補説に相当する第一部第二・第三章において、割愛を余儀なくされた考察の追補であり、かつ構想中の『三国伝記』の作品受容研究の準備作業でもある。

旧稿では『三国伝記』二伝本の本文および訓点について、国会図書館蔵写本は本文や語序の一致度が高く作品成立時の本文を比較的保存し、寛永十四年版本は質量共に仮名訓点が発達しており作品享受に付帯する訓読方式を比較的保存する伝本と正確規定した。

本稿の結論としても基本的に旧稿の見解からの変更はないが、版本の有訓被注字の多さが必ずしも作品成立時の訓点の保存を意味するわけではなく、版本独自の訓が目立って多い巻二の一部説話など作品流布に伴う改変への留意が必要な箇所もあると言えよう。

『三国伝記』のテキスト再建に際しては池上氏注釈がすでに実践しているように、二伝本それぞれに特徴的な改変箇所を析出しつつも、一長一短の関係にある二伝本の本文・訓点を相補しつつ本文を策定していくことが有効かと思われる。

【注】

〈注一〉本話を含む『三国伝記』所収説話で、博士学位申請論文『大陸仏教文学の受容と訓読の研究』各章における引例・論行を以下列挙する。概論文は (<http://rui.nagoya-u.ac.jp/spu/handle/2237/16696>) より全文閲覧可能。  
 卷一四話…(博論6章)資料九<sup>2</sup>

卷五10話…(博論5章)資料六1・2  
 卷六22話…(博論6章)資料十  
 卷八16話…(博論7章)資料十四1・2  
 卷九14話…(博論5章)資料五1・2  
 卷一〇11話…(博論5章)資料四1・2・3  
 卷十一4話…(博論2章)資料五／(博論6章)資料十一1・2  
 卷一二1話…(博論2章)資料八  
 (ただし当該箇所が寛永版本が「咸」に作るとしたのは錯誤であった)

また(博論3章)では『三国伝記』の引例はないが、訓法比較の具体的作業として、『三宝感応要略録』上7話について慶安版本、『当麻曼茶羅疏』卷二十・四十八、『大経直談要註記』十九との四者を対照した。このほか『三国伝記』関連の拙稿には、新出資料を紹介する拙稿(2011)、卷二14の主人公「定生」伝を考察した拙稿(2012)がある。

〈注二〉寛永十四年版本全体の有訓の被注字数を旧稿補訂の示すと、卷三〈五・十一累計は三、五〇〇字、全巻累計は一〇、五二七字である。『三宝感応要略録』『三国伝記』両者の訓点比較は今後の課題となる。また『三国伝記』には今後の出典判明の可能性や、典拠本文を流用する潤色の取り扱いの問題もあり、さらに精査を加えていきたい。

【テキスト】

『今昔物語集』・新日本古典文学大系『今昔物語集 二』(1969 岩波書店)  
 『三国伝記』・国会図書館蔵近世初期写本『古典資料』一・一一・三(1969 すみや書屋) 影印を、寛永十四年版本・名古屋大学図書館小林文庫蔵本をそれぞれ使用した。

『三宝感応要略録』・慶安版本および金剛寺本は大坂大学三宝感応要略録研究会編『金剛寺本『三宝感応要略録』の研究』（2007 勉誠出版）所載の影印、尊経閣本は『尊経閣本善本影印集成』第六集・第四十三冊（2008 八木書店）所収の影印をそれぞれ使用した。

【参考文献】

池上洵一(1972) 『三國伝記』序説

（秋山虔編『中世文学の研究』、東京大学出版会）

池上洵一(1979) 『中世文学における『三宝感応要略録』の受容』

（神戸大学文学部『三十周年記念論集』）

池上洵一(1982) 『三國伝記』版本の浄土教的特徴

（『三國伝記（下）』（三弥井書店）「解説〔補遺〕」）

※ 右三編は『池上洵一著作集』（2001-2008 和泉書院）に収められ、(1972)

は『四 説話とその周辺』第三編第三章・(1979)は『一 今昔物語集の研究』

第六編第四章・(1982)は『一 説話と記録の研究』第三編第六章にそ

れぞれ同題で所収。著作集では(1982)の『三國伝記（平仮名本）』との対

照など、以後の研究進展を反映して若干の加筆がある。

黒田彰(1983) 『三國伝記と和漢朗詠集和談鈔』（関西大学『国文学』58号）

黒田彰(1984) 『新撰沙石集（仏法寄妙集）のこと—三國伝記の一異本』

（『説話文学研究』第19集）

黒田彰(1985) 『三國伝記抜書—身延文庫本』

（古典文庫〈第461冊 別冊〉解題）

※ 右三編は『中世説話文学の文学史的環境』（1987 和泉書院）の第二章・

6・7節として所収、本稿はこれによる。

小林忠雄(1947) 『三國伝記と三宝感応要略録—三國伝記出典考の一部として—

『三國伝記』二伝本と『三宝感応要略録』

（『国語国文』第16巻5号）

塚本善隆(1944) 『日本に遺存せる遼文学と其の影響—真福寺の戒珠集往生伝と

金沢文庫の漢家往生伝に就いて—』（『日支仏教交渉史研究』弘文堂書房）

牧野和夫(1983) 『孔子の頭の凹み具合と五（六）調子等を素材にした二、三の

問題』（『東横国文学』15号、のち『中世の説話と学問』II 『三國伝記

をめぐる学問的諸相』所収、本稿はこれによる。）

松尾謙児(2010) 『三宝感応要略録』訓読史素描

（『訓読語と訓点資料』第125輯）

松尾謙児(2011) 『新出『因縁集』—資料紹介—』

（『名古屋大学人文科学研究』第40号）

松尾謙児(2012) 『三宝感応要略録』のテキスト読解をめぐる』

（『名古屋大学人文科学研究』第41号）

湯谷祐三(1998) 『養寿寺蔵『三國伝記』について』

（『説話文学研究』33号）

渡邊信和(1983) 『書誌・解説』（名古屋三國伝記研究会編『三國伝記（平仮

名本）』上・中・下（古典文庫四三三・四三六・四三八）所収）

渡辺匡一(2002) 『如来寺松峯文庫蔵『三語集』について』

—浄土宗名越派の説草集—（『説話文学研究』37号）

李銘敬(2007) 『日本仏教説話集の源流 研究編・資料編』（勉誠出版）

（まっお ゆずる／日本文化学講座博士研究員）